



年中記

1  
2478  
243





門 1  
號 2478  
卷 243

二年  
年中行事歌合

年中行事  
卷第一



一番

左 四方拜シバウハイ 正朔シヤク

女房

天白アマシロの星ホシはさうろ雲クモはたし小光コミツの言コトははるあハルア小コうウ

右 供屠クニツ蕪ウ白散ハクサン

新中納言

春ハルのコふカめトむシる茶子チをウえはくこし君のメめトか

判者新中納言藤原朝臣申為秀云左歌合の星ホシはさうろ雲クモはたし小光コミツの言コトははるあハルア小コうウ  
伊多イタの初入ハツつ文優ユ美ミ小コゆり常トコ中ナカ例レイ小コ内ウチをウく左傍ワキあらふ中申ウ之ノ  
結ムスぶ茶子チをウえはくこし君のメめトか  
申ウ小コうウておはらしまる侍女シヨウメ

二年  
判者新中納言為秀卿













屠獲白散乃多弘仁年中に多くつた三日月のあひはるあり  
茶子とい小女乃いまの娘をたはれとせりてあまことちゆ一献  
い先屠獲を酒小令茶子に乃まじりて小瓶悉く令く配膳  
よはるは酒まじりて一日は位二日五日三日は六位藏人中  
役なりと扱二献い神明白散をさうり三献は度障散を供と  
異朝乃來由はけり家花記にいり  
屠獲酒昔人丹草菴除夕遺里人茶冷衣浸井中元日  
取水置酒樽名屠獲飲之不疫云々











つれもははらききつ返り念かく侍(時)臨時客侍を以て小御座あり  
く備馬樂此侍侍(石)若水言(い)去年御生氣乃方侍井(い)點志(て)差  
をて人小汲せ(い)て云(い)る日(い)水司内裏(い)あて(い)は(い)も(い)朝餉(い)小(い)  
水(い)を(い)交(い)す(い)り(い)年(い)中(い)此(い)祓(い)氣(い)を(い)其(い)く(い)云(い)本(い)新(い)侍(い)也(い)是(い)ら(い)比(い)比(い)  
か(い)ら(い)侍(い)み(い)事(い)外(い)り

五番

左

白馬節會

頓阿

松乃葉侍(い)ふ(い)か(い)ら(い)め(い)わ(い)と(い)も(い)ま(い)け(い)い(い)ま(い)と(い)や(い)祓(い)の(い)い(い)ま(い)も(い)

石

昔刑

女房

世(い)は(い)ぬ(い)し(い)ら(い)ふ(い)し(い)を(い)見(い)る(い)り(い)の(い)り(い)侍(い)の(い)法(い)の(い)秘(い)つ(い)る(い)秘(い)傳(い)

視

新中納言申(い)さ(い)ら(い)松(い)乃(い)葉(い)侍(い)ふ(い)子(い)日(い)以(い)侍(い)り(い)し(い)せ(い)侍(い)ぬ(い)そ(い)ら(い)ぬ(い)り(い)の(い)  
右(い)又(い)若(い)刑(い)の(い)羊(い)論(い)侍(い)り(い)し(い)也(い)本(い)文(い)臣(い)ふ(い)ま(い)より(い)之(い)抄(い)あ(い)て(い)侍(い)み(い)事(い)  
是(い)申(い)し(い)

正月七日白馬節會(い)の(い)御(い)事(い)は(い)ぬ(い)れ(い)り(い)か(い)し(い)侍(い)事(い)を(い)此(い)今(い)文(い)志(い)ぬ(い)申(い)小  
及(い)子(い)馬(い)の(い)陽(い)乃(い)歎(い)り(い)青(い)春(い)色(い)は(い)是(い)り(い)より(い)て(い)正月七日馬(い)か(い)み(い)し(い)  
年(い)中(い)の(い)祓(い)氣(い)を(い)し(い)り(い)年(い)災(い)を(い)し(い)り(い)其(い)く(い)云(い)本(い)文(い)侍(い)と(い)や(い)れ(い)小(い)御(い)馬(い)の(い)三(い)七(い)九(い)一(い)足  
の(い)色(い)一(い)是(い)ら(い)三(い)才(い)に(い)て(い)内(い)里(い)寛(い)平(い)乃(い)御(い)記(い)小(い)女(い)より(い)節(い)會(い)の(い)儀(い)式(い)の(い)向  
と(い)侍(い)事(い)か(い)し(い)は(い)ぬ(い)ふ(い)志(い)ぬ(い)り(い)右(い)若(い)刑(い)は(い)も(い)ろ(い)か(い)し(い)本(い)文(い)侍(い)と(い)我(い)國(い)の(い)儀(い)と(い)柳  
差(い)別(い)あ(い)ら(い)り(い)や(い)論(い)侍(い)小(い)侍(い)の(い)月(い)乃(い)小(い)朝(い)を(い)廟(い)小(い)侍(い)り(い)り(い)我(い)朝(い)乃(い)儀(い)の(い)  
百(い)官(い)乃(い)行(い)度(い)上(い)日(い)を(い)志(い)ぬ(い)り(い)之(い)月(い)乃(い)小(い)天(い)子(い)此(い)御(い)洗(い)侍(い)事(い)の(い)う(い)ま(い)に(い)昔(い)刑(い)の(い)



















石前男踏奇新の事やは殿入示りし事御かゝる御あはれ給へ  
よろしき事御小侍の御右可為務歟

左御新の申の百官の御右可為務の事は是れ民府を御生れ  
る事や宮内省の御右可為務の事は是れ延喜の式を御生れ

右踏奇の正月十日の御男踏奇の事は御右可為務の御生れ  
十六日也の御月事かゝる御右可為務の御生れ

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ  
御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ  
御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ

石前男踏奇新の事

九番

左 踏奇

菅原

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ

右 内宴

宗時朝臣

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ

判者申の右の内宴の御神泉苑の御生れは御右可為務の御生れ

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ  
御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ

御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ  
御右可為務の御生れは御右可為務の御生れは御右可為務の御生れ



礼記かとしりゆりやをいさし右近衛左右兵衛四府の舎人との射ゆり  
左右大将射手及養子と居大方近衛の後領中てわきりてて後射手  
饗食とふし是より入りわぬし申かや饗食と源氏物治  
ありおかぬ大拍左右かまぬ事なるのつて糸内より右  
内宴と申内之節會より仁壽殿より行はる之判者申ふく春花炮  
月より事かき神泉苑小野小幸と申ありいぬぬと申す  
所門の由志と申し侍りて侍候内宴より多し神泉よりて歌人の不  
足やばり保元小信西申と申かき後絶く侍りて文道より申し合ふ  
十番

左 大原野祭

経賢僧都

二月やまふ津下つるをいさしやけさる花のさるさる

石 祈年祭

秀長朝臣

いさぬてぬ年のいさぬて君代にさしわまり此津やうく流

新中納言申云左右と申小神妙頭人のいさぬて難かく侍りてと申

与務次

江守  
二月  
正月

左大原野二月十一月及び別子細かく侍りて社后宮のまじりて行はる春

日本社に依りて祈りて侍りてと申すは大方神事小大祀中祀小祀の御事也

一月の神事とい大祀と申也三日を中祀一日を小祀と申也は祭ると小

祀して侍也右祈年祭は太神宮以下三千二百廿二座の神をまつりて年次を

いさり申はるは祈年祭といはる祭と申侍り祈年祭月次及び新嘗祭の四祭

貞觀二年正月十八日豊樂院より申すは祈年祭といはる祭と申侍り祈年祭月次及び新嘗祭の四祭



































七月にまゝにぬしむ所琴の緒結むめや伏入契なる年

右 盃蘭盃 前大納言

まふそや内務又つこいせきやうりまふらうとぬ七月かゝり

ま哥七々小ぬ向う琴の緒ゆてつこいまふとゆつこい

難いかまや石内務此つこいそまふりこいこいまふらうとぬ

ゆいこい人いおと定申ゆいこや

乞巧算入のこつ孫の事まゝゆいこい今ま申に及まぬ盃蘭盃事

経文イゆらとやむら母明又まの申時あなまの寺イ須弥山まんと  
ほくろまろりんままうまろりんまろりんまろりんまろりんまろりん  
まろりんまろりんまろりんまろりんまろりんまろりんまろりん

わぬこあてらりこいまろりんまろりんまろりんまろりんまろりん

二十番

左 相撲 七月九日 女房

あゝいけくまろりんまろりんまろりんまろりんまろりんまろりん

右 祈年穀奉幣 大藏卿

ゆいこいゆいこいゆいこいゆいこいゆいこいゆいこいゆいこい

まふらうつこいあつこいまふらうつこいあつこいまふらうつこい

まふらうつこいあつこいまふらうつこいあつこいまふらうつこい

定申す

左相撲こい今まろりんまろりんまろりんまろりんまろりんまろりん



七月にまゝにぬしむる琴の緒はぬめりや秋の契もろく年

右 盃蘭盃

前大納言

まふそや内務又つこいせきやうりまふらうとぬ七月かうとや

ま哥七々小ぬ向う琴の緒はぬてつこいまふとゆき（紅い）は

難いかまや石内務此つこいそまふりこいそまふりこいそまふり

ゆきこい人いおと定申ゆきや

乞巧算入のこいつ孫の事まきゆきこい今ま申に及まぬ盃蘭盃事

是の佛才子目連母の左取こいんてゆきこいこいこいこいこいこい

つこいゆきこい人小ぬし字まふこいこいこいこいこいこいこい

いこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

わぬこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

二十番

左 相撲

七月九日

女房

あつこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

右 祈年穀奉幣

大藏卿

いけりぬてゆきこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

まふらうつこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

まふらうぬけこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい

定申す

左相撲こいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこいこい







二十二番

左

齋ケスソフ 齋ケスソフ

家尹朝臣

奈せし八月八日奉詔云々君小く申す事御心ひかり

右 甲斐駒引

入道大納言

時おぬと民を小くし秋の御事かこつるお海いさる月あつ

左ふくむ目え難銀めて竹あや右に秋とと平けり詞のたつもの

たれ難銀小儀して坊方(兼申人)申す

昨とめて申すこと云はれ昨日は尺尊乃供具と本祭より内裏にて申す

事やみ事とい神食とい事おやあまの神供か申す甲斐国穂坂

乃御牧の駒と八月十七日小あて申す大駒引と一年小數百七國より

二十三番

左

定考カクシキウ 八月十一日

嗣長朝臣

而しカ八月十一日位山とせりるをいへり

右

武藏駒引 八月十六日

頼阿

しりし御事と申す駒引とて申す事いへり

また申す事難銀とて竹あやと云はれ申す事右しりし野小

は家の庭かきせ竹あやと云はれ申す事八月八日

左定考とい事申す昔六位以上の加階とて申す事此處能は跡と



そしつゝ榮壽を給言りし選叙令をふし海かふちのせり德行才名

格勲をふりし官爵を給言りしはくんと選半して定符と定考とい

申や文正の定考に書あつとせしつゝ海小方定言らん侍り是し格(わ)るる

百八月廿五日武藏駒引志事少して侍や不々武彦国よりと袂文脚馬

二十疋小野馬四十疋立野脚馬十五疋毎年少してせりらる也

二十四番

尤 放生會

八月十五日

新中納言

世小くしてはかろく身も生くらん言りしと川神のめくらんは

右 信濃初音駒引

八月十五日

宗久

引とけいをや小ぬれあつ駒のまねぬ神小ねり美やせ奉

左奇はかろく身も生くらん言りしと川神のめくらんは

但右奇をや小ぬれあつ駒のまねぬ神小ねり美やせ奉

左奇はかろく身も生くらん言りしと川神のめくらんは

左八月十五日八幡の神所放生會志事

最勝王経長者流水受の池奥の事

責給し時の中らういかに海へ申侍事

勅旨牧馬の事

大々昔の生く月日

侍りしと川神のめくらんは

侍りしと川神のめくらんは



元 上野駒引

宗信法眼

からまや 牛もをり 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

右

季脚讀經 キリキリキヤリ 川月九日

殿中將

まろせもろし 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

右 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

やう小あやゆり 右君 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

〜公 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

左 是し上野 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

右 季脚讀經 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

僧小茶 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

國史 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

右 不堪田茶

女房

龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

右 奇 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女

龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女 龍女



二十五番

左 上野駒引

宗信法眼

からまや牛もともり此の如く影女如月史す傍の西田也

右

季御讀經 キノミヨリキヤリ 八月九日

殿中將

まろせもいほぬ君の春秋をまほゆ沖法も志保 まろせもいほぬ

左 三つ帯とゆかり記詞少てゆり影女如月史かと信了

やう小あわしゆり右君 あわしゆり 史中判者 史中判者

左 是れ上野水牧所馬八月廿八日小川之子細河前申傳ぬ

右 季御讀經にて大盛若春 大盛若春 春秋百教少て清せよゆり茶也

僧小茶代賜 あて多り 茶の清り 大也 史中判者 史中判者 給物也てあり

左 大内い茶園をゆり中比梅尾如月史今厚ん茶入禮ふ

二十六番

左 御燈 九月三日

貞世

ま向とゆかり あて多り 史中判者 史中判者 給物也てあり

右 不堪田茶

女房

ふろ秋 ふろ秋 子所 子所 のか のか 杯教 杯教 うい うい 比方 比方 よま よま ぬつ ぬつ かな かな 史中判者 史中判者

左 奇 奇 両優 両優 史中判者 史中判者 同 同 称美 称美 右 右 官茶 官茶 比 比 史中判者 史中判者 今 今 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者

史中判者 史中判者 甲 甲 史中判者 史中判者 乙 乙 史中判者 史中判者 丙 丙 史中判者 史中判者 丁 丁 史中判者 史中判者 戊 戊 史中判者 史中判者 己 己 史中判者 史中判者 庚 庚 史中判者 史中判者 辛 辛 史中判者 史中判者 壬 壬 史中判者 史中判者 癸 癸 史中判者 史中判者







色くあらざる野入のじりも三人の花よりありしをてうとるがは

石 十月更衣

為邦朝臣

多代之義流し乃ふぬ衣まひいささくあめめと月をれが

左之くのをせり衣をりていふ所もあつらん道達をせ

おとりのくゆり石冬も更衣あつらん題中ゆきをせし

朝々ゆきと初時ぬかき御出立なほり一人一同小定由

右撰中し多事あつらん式の本あつらん叙支の道達を叙

上人せしわりのくさるをいじりいへん忠告小定をいへん

事めてゆきと秋の叙の中ふかゆや右十月の更衣事別

及ゆり次

二十九番

左

射場始

十月五日

二位中將

右のくまらるる西と名射席の海いむしとあまあふり

右

維摩會

十月十日

新中納言

くあひよりほへりまははの叙やまも唐きうたしして

射席

あつらんゆきとあまあふり

判者

申小のて右維摩會

左射場始いしゆきとの馬場敷小せりて

束帯ゆきと是をゆきと神のよきゆきと家く忠口傳ゆきと

鞠かどのまてらひあやゆきとはははる人しとをがまよや射席











この御口の禮もおぼしきことにてあらうに川が又たたぬく傍方からいせやまのりも  
たある申判者申ワ

新嘗會祭今年此初稲を神小あてまつせ給之代始小大嘗會と  
このひやうはまのこい新嘗會と申す

用明天皇二年四月一日より一日

神小をいみ其後君も

りり〜事々  
節會入名之字細ふたぬ〜なるや之子細六百番の奇合小言こ  
りり〜事々

三十二番

右 賀茂院時祭 僧宗久

まもあふりの川風止あいの神小くあひ言せりん

右 月次祭 宗時朝臣

夏入言やりのかより小月山と志張暮入神若幣帛

ら山藍入神いつ祈小あかめゆも神小くい言こせふかと優なる也

人々申キ右夏の言奉給とりのに付こ二夜の月次祭といふ

ふしゆきこととい外神今食らぬゆいぬてやとて夏ゆぬ

左賀茂院時祭事字多御門まゝに付是に申傳り時より給

けり小大册神現〜行〜に時祭と給ふ〜(或甲)〜予得言は小我こ

ゆの事志りゆ〜次四門申せ給〜と〜し〜も供〜し〜者今あり

く申よりとて給てあ〜せ給るの〜を籠か〜くお〜い〜小帝

位小つて給れい寛平年中より祭はあてふは〜せ給り人乳



さるにの禮もねいしをいさるるに月がふをぬく務方かいしやまらるる  
おあつ申判者申つ

新嘗會祭今年此初編初と神小あてまつせ行代始初小大嘗會と

申ゆの右豊明節會祭今年又い初と神小をぬ其後君もき

いやく下長小し行は小節會祭をかろり凡まゝあつりこい熱く

節會祭入名之をぬふにぬくろる名やま子細六百番の奇合小言こい

りり〜事なり

三十二番

右 賀茂院時祭

僧宗久

まもるりかまの川風山あいの神小くぬい雪をそろん

右 月次祭

宗時朝臣

夏入言やうのふり小月山と志カク張暮入神者幣ヒラ

さ山藍入神つ初小あかたゆとし神小くぬい雪こせふかと優なる也

人々申き右夏の言年祭をいひにゆき二夏の月次祭といふ

ふしゆきこととひ外神今食らととゆれぬいぬまやとて夏ゆぬ

左賀茂院時祭祭事々多御門御まにゆはに申ゆり時より去給

けり小大册神現し行くと時祭をゆふイ申ゆりて終言ゆ小我まこ

ゆの事志りゆり次口門申す也終とりゆし事終りて終言ゆり

く申ゆりともなうておとせ終言ゆりぬ能かろくおのり小帝

位小つて終言ゆり寛平年中より祭はあてふはせ給り人乳



よりえ事... 六月十二日太神  
宮の御幣... せ行なり

二十三番

左 神今食 三月十一日

入道大納言

わけぬ... 祓りぬる夜... 神

右 内侍所御神樂 貞世

久々のあめ... 神のうひ... ぬかりの水

左神しめる夜... 神今食... 神小神供... 和院小永幸

神膳... 今を神祇官... 内侍所... 神樂賢所... 年小... 神要別... 細竹... 次

二十四番

左 佛名

女房

仕... 身... 衣

右 荷前箱

宗信法眼

右... 拍梨身... 宗信法眼... 右... 左... 甲















あつちや桐壺トウケより川景舎カワケの相あひまを庭にわに（原）ありた桐壺に  
中ちゆうより舎やの壺へよりやたふ靴舎カゼの中ちゆうやふ木きの仲ちゆうよりいふ教  
四十番

左 寄梨壺リウケ在

頼阿ライア

仔細しじゆの志しははく此こゝのふとくふ物ものは昔むかしいふふふふ

右 寄藤壺フジケ在

女房

後のち分ぶんるふみ小こにわりの仔細しじゆせんぬぬ神かみのわすの深ふかを

こゝの（の）五ご結けつ合がひの梨りつ不ふ志し人ひとの事ことや後のち撰せん者しや侍さむらいたる  
わすの志し人ひとの事ことや後のち撰せん者しや侍さむらいたる  
事こととふふの優う小こ侍さむらいの務つとめ（女によ中ちゆう判はん者しや）

梨壺リウケの昭陽舎シヨウヤウカより是こゝと梨りと庭にわに（原）ありた梨壺に  
飛香舎トウカウカ又また後のちの花園カワノ白しろのり（原）のや中ちゆうに（原）鶏カエデの村むら本もとに（原）ありた後のちの  
林はやし秘ひ抄しやう小こに（原）はり

四十一番

左 寄梅壺ウメケ在

貞世

仔細しじゆの志しははく此こゝのふとくふ物ものは昔むかしいふふふふ

右 寄雷鳴壺ライメイケ在

二位中將

人ひとの志しははく此こゝのふとくふ物ものは昔むかしいふふふふ

仔細しじゆの志しははく此こゝのふとくふ物ものは昔むかしいふふふふ

より定申じやうしん矣







るけかたとなふ紫かん九章やらう記まよりれりりらるる紙

右 宣命

願宗

とむかば人まらうわむとふくぬの命てきとふとをかしき

左 右近のほくはたの申かき思ふをゆるしくゆるも

又播磨か美中戸人ありておふりゆるいさん

禁中夜行のいさ石を湯府夜めりをゆる也右近を子右近せうき

小西よりゆる右宣命より天子の足とけりを百人官に布建あむり

いほくあうするありいさ官(官)のいさ宣命又事かてゆる

四十四番

左 詔書

大藏卿

つんふりう二房う言ては君の関白をきくあり二紙

右 行幸

内大臣

万民てうあさともかり言り目入る君れつるをきく

ら関白は詔書左右わいすすとて右の善悪いり次賜の字を

つるをきく

詔書といふ事いさもんとけりをくわくはあはれりせうあことかて

ゆる宣命いまはしく大倉けり物とわくも次より詔書も同くゆると

と諸卿小あま(覆)養て二夜養関して可の字は加行とほあ事

の子細かたりゆる右の幸はて手折はあふ万民詔書をわいて温

をうらぬるあふいさとい申しは後に行て幸せと(あ)や



四十五番

左 即元振

前大納言

君の代忠いふ事をもつたうまい人との御心をいふ

右 御賀

新中納言

はよりなほ君のまこといれはさしあふる月をいれは

さまじいとせいに侍いさるる御心をも 年月ゆらぐ(左) 具り

さゆあらし〜人々定り

左のまこといれはさしあふる天子御元振の將上考とて現任中納言

元年の撰で水酒をさすまの祝詞の献儀事あり之右の御賀の

公鳩の杖撰集れ中納言の事あり

四十六番

左 天文奏

宗時朝臣

系図かゝる久く多(多)威の星をかんていせうふ光れ

右 祈雨

僧宗久

の西雲流るるあ形かひく水ぬき神小むけの程やうと移ん

ささりの星を老わすの空小めもまの物嘉瑞あつとつる物小右雲小

水より神候ありて誠のこゝ思目よせ(左) 言持小物(左) 判者

是を申す

左天文奏の司天此人密奏の宣旨かありて慶雲奇星又

あまの或は例小あふ風雲をあまのまこといれさうさひく奏し物に申す



密奏より外は事少く封して執柄者人月夜分  
あまふりかいらりかく被成かされ密奏よりや志祈雨よりあま由  
祈や大方のまはいを志神おかく延表式より足より水は神の  
四十七番 頓阿

左 止雨

海も獲り河もいり世は浪をてもるら神もけりつる也

右 封事

女房

木も多一つも多く次いり可於あやまり屋の世成らん

左河もいり世は浪をてもるら神もけりつる也  
あま世よりせん昔はけりて凍言いと不しにまはりておあるり

判者 是之

左止雨のいりり晴といけりや廣瀬誌田神と延表式の止るは社小  
入給ゆめや太いをり事りか夫とつらけりよと申あるといと也  
んかきけり老い誂謗の木とてあやまらけり事り物木小書つま  
けりけり世は浪をてもるら神もけりつる也又凍言いと不しにまはりて  
あま世よりせん昔はけりて凍言いと不しにまはりておあるり  
天子は政りあつる凍言いと不しにまはりておあるり  
志事りあつる凍言いと不しにまはりておあるり

四十八番

左 恩赦

二位中將



己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

右 牛車

忠教朝臣

己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

右 牛車 (おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

新中納言

恩故(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

是の(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

大故(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

かし陣中(車小牛)つゝあるをふしとぬめく

四十九番

左 庚申

為邦朝臣

出でて(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

右 奏慶

入道大納言

己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

己の心持りきりしもの(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

判有(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

左庚申夜(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく

補修(おぼゆるとせ)つゝあるをふしとぬめく



後拜賀のふりてわきい別入屋うがし

五十番

左 輦車

為邦朝臣

雲舟少らりてかふふ車やたふさるる高きもの

右 大唐高客 女房

我國の山川をうらみ年ふふ海を渡る舟をせぬ

左 輦車 河のたうりわりく優小舟も右も年ふふを

うせせらまはるはうとそ船(兼)判者(兼)権(兼)もねたは

けつり

輦車こりし掃さるる樂のふう小はたりたる車こりしとよりぬ

宿老の大臣又女御文衣かたはたき入れて内裏の舟を通行者なり

相垂た文衣しは車(兼)ゆきまはる中源氏物語もゆきや右大唐高客

とりかきりあし(兼)舟我國へ來るるやはあそつとよあは大唐のふふ

ふゆきやあつりしと昔は唐船も百済國よりついでに渡朝の志をた

す神功皇后の二新羅を平言(兼)年ふふつらありの送

事 持統文武の比まていあしはゆき後(兼)車(兼)おとし(兼)出(兼)ゆき

祝詞をわらるるはりりり

判者 権中納言為秀卿

加最儀

判者 女房書之

貞治五年十二月廿日

當座



作者

女房

主人宗 関白良基公

内大臣

二条恩 師良公

入道大納言

松殿忠嗣卿  
法名觀意

忠親朝臣

鷹司中將

阿

俗名恭尋

僧宗久

筑紫僧

為邦朝臣

宗近為秀恩  
左條左中將

貞世

今川伊女子

宗時朝臣

兵庫頭  
兵部大輔

新中納言

冷泉為秀卿

前大納言

今小路良基公伯父

二位中將

四宮善成卿

大藏卿

坊成 長經卿

頼業

春宮亮 勅修寺入道

殿中將

師嗣朝臣良基公恩

家子朝臣

月輪中將

蘆堅

武藏掃部助入道

經賢僧都

於河子  
安宗僧都

秀長朝臣

菅少納言

嗣長朝臣

中務大輔  
醫師

兼源

縫殿頭 吉田神之

宗信法眼

羽別

守長

丹波守  
醫師

長祿三年六月廿五日書字之終



